

曾屋龍典氏のご逝去を悼む



日本火山学会会員、旧通産省地質調査所火山地質課長、元火山噴火予知連委員であった曾屋龍典さんが、平成18年6月7日に肝不全のため地元の病院で亡くなりました。享年68歳でした。今年にはいってから、容態が悪化し入退院を繰り返しておりましたが、薬石効なく帰らぬ人になりました。

曾屋さんは、昭和38年春に北海道大学理学部地質学鉱物学科を卒業され、直ちに旧通産省地質調査所（現産業技術総合研究所地質調査総合センター）に入所し、平成10年3月に定年で退職されるまで、地質学、環境地質学及び火山学の分野で幅広く活動されました。その後、故小野晃司さんと昭和45年秋田駒ヶ岳の噴火調査、昭和52年の有珠火山噴火調査を行い、昭和58年には、宇都浩三さんと三宅島火山噴火調査を行うなど数多くの噴火対応の経験を積まれました。そして昭和59年からは、旧地質調査所環境地質部環境地質課長を勤め、数多くの地質災害や火山噴火への対応の一線に立って活動されました。昭和63年には、地質調査所に新設された火山地質課の初代課長となり、当時活動中であった伊豆大島火山、平成元年の伊豆半島東方沖の海底噴火（手石海丘噴火）、平成3年雲仙普賢岳の噴火において、地質調査所における迅速な緊急対応研究を指揮されました。平成2年4月から同10年2月までは、火山噴火予知連絡会の委員を勤められました。ここに曾屋さんを偲んで、ご活躍だった当時の思い出話をご紹介します。

伊豆大島が昭和61年11月に噴火した際、私はまだその年に地質調査所に入所したばかりで火山に関しては門外漢でした。ただただ、綺麗な溶岩噴泉の様様をテレビで見っていました。11月21日は土曜日だったのですが、その日の夜の船で伊豆大島に噴火を見に行こうと思っていました。ところが、その日の午後、割れ目噴火が起き

て全島民が避難することになったのでした。故小野晃司環境地質部長の部屋で土曜の午後、割れ目噴火の様様をテレビで見っていたのを記憶しています。その真最中に曾屋さんは御神火茶屋で割れ目噴火を目の当たりにしていたのでした。後日改めて伺ったところ、曾屋さんたちは、ほかの人々が避難する中、最後まで御神火茶屋にいて、道路を下っているときに新しい段差（割れ目）ができていたのを発見したそうです。そのまま警察署へ行って、カルデラの外側でも噴火するかもしれないからと、北西方面の危険性を指摘しました。そして、全島民が避難したあとも、警察署でずっと火山活動に関する助言をしつつ、伊豆大島の動向を見守っていました。責任感は一層強く、火山の専門家として行すべきことをよく心得ていらっしやっただと思います。それは、伊豆大島の噴火から3年後の手石海丘の噴火時のエピソードでも確認できます。当時、伊豆東方沖で群発地震が多発していましたが、それが火山性であるという認識は世間にはなく、市民の生活を守る立場の自治体でも噴火が起こる可能性を考えてもみなかった状況がありました。曾屋さんは、当時、まっ先に伊東市役所を訪ね、「これは火山なんだ、噴火の可能性がある」、と市役所の担当の方に力説したそうです。結局、噴火まで待ちきれず、一度、つくばに帰ったのですが、帰ったとたん伊東沖で噴火が起きました。そして、夜中にあわてて伊東に戻ったところ、市役所の人に、「噴火するから、危険だといって、逃げたんでしょ」といわれたそうです。今、思えば笑い話になるのかもしれませんが、当時は真剣に火山噴火に対する理解を自治体に深めてもらわなくてはならないとの信念で様々な活動をされていたのだと思います。この精神は、火山学の研究を行う者にとっては大変重要で、自分たちはいったい誰のために研究を行っているのか、について、深く考えさせられた記憶があります。

さて、話を伊豆大島の時に戻します。私の転機はこの時に起きました。全島民が避難したため、1ヶ月の間に観測体制を整えるという仕事が国土庁（当時）からきました。私を含めた入所したばかりの新人は、その専門と無関係に伊豆大島の観測体制整備要員になりました。そして、予備調査ということで11月末に島に渡りました。実は、私が曾屋さんとはじめてお話したのは、伊豆大島においてなのです。自衛隊のヘリコプターで強い雨の中、伊豆大島に渡ったとき、外で待っていただいていた

のが、曾屋さんでした。それ以来、曾さんが在職されていた平成10年までの12年間、公私の両面で大変お世話になりました。今思えば、ど素人の無礼なやつをよくあそこまで、相手して下さったものだと思います。こういうことをしたら良いのではないかとか、これではダメなのではないか？のような、話をすると、いつも決まって答えは「じゃ、やれ」でした。実際、やるとなると計画変更や予算措置やらなにやら大変だったはずと、今思うのですが、脳天気な当時の私は、何も考えずただ火山のことだけ考えておりました。私は、いつも気さくに話に応じてくれる曾さんに、次々と火山のわからない話をぶつけてゆきました。思い出せないくらい多くのことを間違いなく学んだと思っています。

次に火山学者としての曾さんの印象を述べます。火山とはいうまでもなくひとつの自然現象です。したがって、火山の研究は地質、物理、化学といったある一つの分野だけでは、到底捉えることができない対象を相手にしたものです。曾さんの各分野をまたぐ知識は非常に豊富だったのが印象的です。それは、地質調査所の火山研究を引っ張る上でも必要でした。地質調査所では、多くの総合的観測が行われ、地質学的調査にとどまらず、爆破地震探査等の物理探査や測量まで、そのほとんどに曾さんは関与し、助言をしておられました。私の火山ガス観測においても、曾さんには機材の設置から観測データの解析まで非常にお世話になりました。私はそのどん欲なまでの火山研究に対する執着は、おそらく火山現象そのものを理解したいという強い信念に基づいていたのであろうと思っています。

特に印象的であった曾さんの研究をひとつご紹介します。曾さんは、早くからXRFやEPMA等の新しい装置に強い関心を持ち、多くの分析を初期に行われています。伊豆大島の1970年代の活動期に放出されたスコリア等の火山岩片の観察・分析を通じて、火山噴火に関

わるマグマプロセスの考え方は非常に新しいものでした。全岩化学組成が斑晶の量に依存していることから、斑晶量の違いの原因を斑晶とメルトの密度の違いによる移流と考え、マグマプロセスに結びつけて噴火機構について議論しました。当時としては、岩石学的知見からマグマプロセスを論じた点で、非常に斬新な考えであったと思います。

曾さんは、退職されてからも、ご本人の持っていた映像や写真資料や地質試料等を整理されるため地質調査所を訪れていました。膨大な写真や映像資産は、昭和45年の秋田駒ヶ岳の噴火、昭和52～53年の有珠火山噴火、昭和58年三宅島噴火、そして昭和61～62年伊豆大島噴火等を中心に噴火映像などを含めて大変貴重なものが多くあります。これらの資産が今後の火山学の発展に活かされることを願ってやみません。

最後に、葬儀の際に奥様の真紀子夫人からお伺いした話を含めて曾さんが退職されてから最近までのご様子をご紹介します。たびたび富士山の写真を撮りにいたり、北海道の全市町村を一筆書きで制覇するドライブをしたりと活動的に行動されていました。また、昨年は90歳を超えてお健在のお母様(北海道在住)と、沖縄にご旅行されていたそうです。また、残念ながら果たせなかった夢になりましたが、船による世界一周旅行も予定していたそうです。最後までフィールドが好きで地球を愛していた曾さんの姿が目に残ります。やさしい奥様とともに、多くのお孫さんに恵まれ、自分のやりたいことをそのまま実行することができた人生は、まさに幸せな人生であったといえるのではないかと思います。曾さんのご逝去は早すぎたと思います。ここに改めて、曾さんのご冥福をお祈りするとともに、曾さんが残された火山への思いを心に刻んでおきたいと思っています。

(風早康平)